

永江 「お水取り」の起源

「お水取り」の起源

永江 秀雄

若狭は海のある奈良であるといふのは、いつだれがどうして言い初めたことか知らないが、たしかに味わいのある言葉である。私は年来、若狭の特に「遠敷」という地名について探求して来たが、このことに関連していつしか、有名な奈良二月堂のお水取りと若狭遠敷との関係についても学習すべく志している者である。即ち、海のある若狭の水清き遠敷から、奈良へ聖水が送られるという昔ながらの伝説とその行事に、尽きぬ興味を抱かずにはおれない。

「お水取りがすむと春が来る」といわれる奈良東大寺の「お水取り」とは、東大寺二月堂で毎年おこなわれる修二月会（または略して修二会）、すなわち旧暦二月一日から十四日まで（現行は新三月一日から二週間）実施される十一面悔過法の全体を意味するのが現在一般のならわしとなつていゝるが、本来はその修二会も終りに近い二月十二日の深夜、二月堂の傍にある若狭井から香水を汲み上げる儀式のことである。伝説によると、この修二会は東大寺開山の良

弁僧正の高弟である実忠和尚によつて、天平勝宝四年（七五二年）に始められたといわれる。そして実忠和尚がこの行法の間全国の神々を勧請されたとき、若狭の遠敷明神だけが魚取りをしていて遅れて参加されたのであるが、まことに有難い法会であることを喜ばれて若狭国の良水を閻伽（あか）の水として献じたいといわれた。その託宣の終るや二月堂の前庭の大岩をうがつて黒白二羽の鶴が飛び出し、その穴から甘い泉がこんこんと湧き出して香水が充満した。ここに井げた組んで閻伽井とされたのが、今に至るまでお水取りの厳修されている若狭井であるといふ。

お水取りに関する右の伝説は既に周知のところであつて、古くから多くの書物にも語られてゐる。所で、その最も古い記録は管見の及ぶ限りでは、嘉承元年（一一〇六年）から長承三年（一一三四年）の間に編集されたという『東大寺要録』巻四「諸院章」にある。平安末期のこの記録より更に古いものは、今のところ誰にも発見されてないようである。なお、東大寺要録にも「彼大明神在若狭国遠敷郡一人崇教具大威勢二前有二大川一川水碎浪奔波涌流由

献三其水一河末渴尽俄無三流水一是故俗人号三無音河二云々」とあるように、若狭から遠敷明神がお水を送られたので、その神社の川下は流水が尽きて「音無し川」と呼ばれるようになったとは地元の遠敷でも言い伝えられているし、お水送りの水源といわれる遠敷川の鶴の瀬（うのせ）では、古くから現在に至るまで幾変遷を経つても、お水送りの行事が年ごとに厳修されているのである。

海があり清流に富むのは何も若狭だけではないものを、なにゆえ若狭の遠敷から奈良東大寺へ水が送られた（という）のであろうか。どうして遠敷と東大寺の間に、かくも密接な関係が発生したのか。歴史を学び郷土を知る上に、興味も深く重大でもある「お水取りの起源」について、探り初めて既に十年近くになるが、今なお私には解明の見通しさえもついていない。自ら郷土史研究上の重要な一問題として、ライフワークの一つとも考え、今後私は、お水取りの発祥について学びつづけたいと思う。なお、今日まで学び得たことの概要を、仮にまとめると次の通りである。

まず、東大寺においても現在では、お水

取りが若狭と東大寺を結ぶ伝説を背景として行われるに至つたその理由については、不明のようである。東大寺図書館長の上司海雲師の御教示によると、前述の如きお水取り伝説の発生は「実忠和尚と若狭、或は東大寺と若狭との関係から」ではないかと思ふとあり、具体的には研究者によつて、莊園関係からだとの考え方、若狭と二月堂との水質が同じだと思ふという水の研究者の意見、印度・支那方面から若狭へ僧侶とか文化とかが或る時代に入つてそれが奈良に來たことを意味するとの見解、などがあるといわれる。

奈良在住の歴史研究者である桑原蓼軒氏の御示教によつて、貝原益軒の『西北紀行』に次のような記事があることを知つた。即ち「遠敷(小浜より一里許)、上下の祠あり、山上の神宮寺、これ古の僧実忠が住せし処なり」と。まことに重視すべき記録である、が、更にその根拠となつた史伝がほしいし、詳細な考証が必要とされるであろう。なお、東大寺開山の良弁僧正は、幼いときワシにさらわれて來て義淵僧正に拾養されたという有名な伝説があり、その出生地も江州の志賀の里・山城の多賀・相模な

どと数説がある。所が、若狭遠敷のお水送りが行われる鵜の瀬の近くに原三郎兵衛という名家が今も伝わっているが、実は良弁僧正はこの家の子であり、ワシ或はタカにさらわれて行つたものである、との言い伝えが地元に残されている。しかも、この原家は若狭の井太夫と称して、お水送りやその他の神事にも古くから重大な役柄を勤めて來たという。

現在近畿随一の民俗研究者である井上頼寿先生のお教えによると、若狭国は古くから海産物などの食糧品を中心として王都(奈良・京都など)へ通じていたため、これらの中から特に人生と日常生活のすべてに最も必要な水によつて、この水が若狭から奈良に來たという象徴的な伝説が発生したものと考へるといわれる。そして、その裏付けとなる多くの伝説や記録を教へて下さつた。黒川道祐の雍州府志に、京都の(八瀬大原の近くの)高野川の上流は若狭なりとあるし、京都の古い伝説に、堀川の上流は若狭なりといひ、一条で東西に分れてゐるが西の川を今も若狭川という。京都西七条にある水薬師寺は古く大池があり若狭の海から地底をくぐつて潮水が通じていた

と伝えられ、若狭からの水流が豊富であつたときは尺余のアジが泳いでいたが、今ではメダカぐらいのアジが現存しているといわれる。狂言「こぶうり」に「若狭の海のコブ召され候え」など、ともある由である。

所で、さいきん私自身が着目していることとして、遠敷(宇丹生)は丹砂または水銀産地であつたという歴史学者松田寿男博士の学説と実証に基く見解がある。奈良東大寺の大仏を完成(その最終仕上げとしての鍍金を)するため、各地から水銀を求められたことは既に明らかとされているが、若狭遠敷にもそのための結びつきがありはしなかつたか。また、万葉歌の「まがねふく丹生」にさえ比定する学者すらある近江伊香郡の丹生神社で、赤土(丹土)を神前に献じてのち参拝者の額に印する行事が古くから行われているが、遠敷鵜の瀬の近くの八幡神社でお水送りの当日に行われる山八の神事でも、神前に供へた赤土を参拝者が指につけてなめ、また牛玉紙に印する行事のあることが、何かの共通性を表わすようにも思われ、前途遠き研究の一時に憩いと楽しみをも覚えてゐる私である。